

北大文武會 創刊號 馬術部々報

昭和十五年六月十日印刷
 昭和十五年六月十日發行
 發行所 北大文武會馬術部
 印刷所 札幌市南一條西六丁目
 修文社

はしがき

從來吾が部は練習日が一週間の中土曜及日曜日の二日のみである爲に、多少缺けてゐた憾みが無きにして非ずといふ状態であつた。

吾々の先輩もこの疾ぎ心かう苦心せられた様に思受けられた。更に部員相互の懇親、連絡と云ふ事に、多少缺けてゐた憾みが無きにして是非中といふ状態であつた。吾々の先輩も此の疾ぎ心かう苦心せられた様に思受けられた。更に部員相互のみならず、現部員と先輩並に部に関係ある諸君との連絡をより緊密にしていふことを考へて、この部務発行を企てた次第である。始めは二、三十頁位のを、毎学期位に出すつもりであつたが、紙面を少くして発行の回数をもくした方が経営も少く、手数を省けより効果が大いであると思ふまいかといふ意見に基いて、將來の擴充を期しつつ、本紙の発行を見るに至つたのである。

庶くはさうやく下のこの小冊子が、その祈ふ使命を全うし、部の發展と共に益々充實せんことを希望し、

部員諸君並に先輩、関係各位の御指導の程を
 尚願ひする次第である。

所感

部長 太 柔 東 光

この度幹事諸君が馬術部々報を発行して部員相互の乃至は部員先輩間の連絡機關として計画されたことは誠に結構な事と思ふ。先に十年誌を編纂して我部先輩諸君の跡跡かに知り得た我々は、此の新しい機関によつて更に部の現状を刻々先輩に伝へその進層板を新しく見て歡べることになつた。又此の部報上に於て先輩からも種々の二ユーを掲載し、或は部に対する合理的な御意見や件提出出来るものから樂しんである次第である。

御承知の如く昨秋日本乗馬協會、学生馬術協會、國際馬術協會を打つて一九とする大日

本馬道會が生れ、全國各地の競技會の如きと主としてこの馬道會に統合されることになつた。

過去五年間札幌の乘馬會に聊かたりと重鎮に來つたと信ずる我部主催の札幌乘馬大會の如きも本年は大分趣を変へて実施される模様である。日本馬道會は何分にも我々の間は設て置かれ、手づかへが尚荒削りの感あるを免れず、我々從來の乘馬団体關係者から見ると多少不満足な点なきにしも非ずであるが、設立の主旨に與つては固より滿腔の首肯を表するに百てない。同事も所謂説せば分る筈であるからまに胸襟を開いて語り合ひ、光風満月の無事を以て共に争つ携へて斯道の爲に盡して行き度いものと思ふ。

先週上京の師範戸部少将の講演を拝聴するの機を得たが、此講演中特に部員諸君にお伝えしておきたい一言がある。今次車友に於て馬術の輸送中弊れたものが相當の數に上つてゐる。

、届が、其の原因の... 聞かす知識... 斯ういふ意味で...

、聞かす知識... 斯ういふ意味で... 此處に便めて...

榊屋會馬術部成立に関する経緯

多年に亘る先輩の眞摯なる努力により又昨年昔師十... 而も総務の方として...

、出席者七十二名... 榊屋小川君立ち...

、又各部の説明にうつり... 榊屋會馬術部として...

、榊屋會馬術部として... 榊屋會馬術部として...

、之に對し文武会とは... 榊屋會馬術部として...

、矢張りつたやうだつた... 榊屋會馬術部として...

、榊屋會馬術部として... 榊屋會馬術部として...

部員近況

◎昭和十五年度馬術部幹事が決定した。主任 石井和彦

開票の結果は			
馬術部	賛成 50	不賛成 10	無効 1
射撃部	42	18	1
音楽部	28	31	2

選手監督 岡田光夫

會計 小林誠平

庶務 福本送夫

同 山本乙彦

同 大戸進

同 大戸進

同 田口暢

同 井定知

の本年度より、御皇会系術部が誕生したので、豫料幹事諸君大いに張り切つて入部歓迎に努めた結果、二十五名余の多数の新入部員を得、練習時に向、四十名以上も出た、実に壮麗を極めてある。

◎全日本学生選手権大会北海道選送は五月十二日に行はれるが、吾部からも多数参加の豫定である。

◎去る五月五日部員一回花魁判に徒歩遠足を行ひ、飯川の自炊に台致を打った。

◎従来五月下旬に行はれて来た札幌乗馬大会は本年より大日本乗馬協会よりの巨額の換算を得た盛況に開催されることである。

期日七月余選送、会場としては競馬場が候補地に挙げられてある。(山根記)

北九華事消息

送手監督として其の履名を擧がせて下條親次と、実科幹事として勇名を馳せた佐藤誠也乃木谷清喜員の両氏は多年の宿望叶ひ、前つて慶應自治政府へ奉職されることになり先日三氏より張敬口清第一便を載いたので左に紹介する。

部員の皆様御元氣ですか、札幌乗馬大会も今年から豫算も多くなり、さや盛大に開催出来るだらうと思つておます。今日佐藤君、乃木君が学院に來られました。之で吾等の同窓も三人に成りました。(下條氏)

四月二十六日十六時五十分、國境を出てから一ヶ月余、油を二ツ渡つて、國境を三ツ越えて漸く着きました。吾等部の爲に馬鹿になつて下さい。

(佐藤氏)

相棒の忠告も元氣、お互に同伴者の迷惑を誤つたとは云ひながらも、遂に國境

口返來つてしまひました。皆様の御努力を期待いたして居ります。

(木谷氏)

尚追伸に曰く

「陳若北大O・Bライデンタ・クラブ兼慶應支部も此處に目出度誕生致し候間、御報告致候。役員及び部員は左記の通りに候」

支部長兼平部員 乃木 清喜 貞

最高顧問兼平部員 下 條 親

部員兼平庶務 佐 藤 誠 龜

◎石の三氏より一金券拾円位の御寄附を頂きましたので御志に甘へて、部の備品入籍の費用に廻しました。備品箱は五月下旬に仕上る予定である。(山根記)

練習状況に就て

昔草詣ゆる春とはなり、新入生を迎へて我々は元氣一杯練習に励んで居ります。

現在近七回の練習を致しましたが最高四十七人、最低三十五人の出席者を、僅か十二頭位の馬でこなすことなので、すから相當に困難と不便とを感じて居ります。先づ準備運動と簡單な馬場運動を旧部員が行ひ、その後新入部員五十分

交を位で時同はオライに成つてしまひます。遠く目寒まで来る勢にこに、なるべく乗せたいと思ひ、又乗りたいといふ旨の稟請は判つて居りますが、何として致し方ありません。

お互に不便をこのんで共に進んで行きます。例年ですと二、三回の練習でがつたり人数が減るものほのですが、最近車装の進展に伴ひ馬術部員思想及び糧費委馬術部設立のためと思はれますが、今日見る如き盛況でこの状態は相当長い期間続く様に見られ、部の盛況にお目出度い限りです。とにかく皆平均に求れる様に努力して居ります。

使用馬は五令になつた古馬と欲死馬とを以て當て、居りますが、欲死馬の能力充分ならず、調教不完全にして充分の馬術的感覚等味はへません。騎馬の居りぬ事は助かります。而し昨年の如く使用馬全部を脱駟馬に求めてゐる練習に比ぶれば、全部乗馬を以てする今日は何体ない位で、絶大な御厚志を部によせて下さる染谷大尉殿はじめ隊の方々に厚く感謝して居ります。無理をすれば危険が伴ひ、無理をしなければ又新歩が遅れて、練習時間の短い我には上運せず試合に持つて行く事は出来ません。

基礎工事が出来なければ何にもなりません。出来たものはかたわりのものです。し要求の程度を高めると

従つて馬術を固く仕るべきに思はれます。その結果は馬術の部員を益々増進するに成る事を期して居ります。

何卒御指導の程御願ひ申し上げます。

(岡田 記)

東日本騎乗競技大會

戦 績 報 告

豫料 平 井 宏 知

三月二十三日代々木の東京乗馬倶楽部にて開會式奉行され、会長挨拶に続いて競技に入つた。

余は当日の競技に出場せざるを以て教頭の見学して歸つた。翌二十四日代々木競馬に於て二日目の競技に参加す。中障壁競走、約一米十程前後であつた。試合前軍馬を管輿せられ約一時間試乗出来た。余の馬は仲々の名馬にして其の論にては班長の馬なりと、癖を言へば口堅くひつかけ氣味とや言はん、第九番目、自製の長靴に颯爽と強風を以てて出発。

第一、第二、第三と難なく飛越、第四障壁を飛越後、馬や、興奮し鋭角回転を手うじて立ち、第四に向ひ走りしめすきつてきた故か落

下、第五、第六を飛び越して四つ目の障壁を越して海へ相面、又は向ひ障壁を越して障壁を越して障壁に突入、障壁の向腹に突入へは障壁行七人と同様の障壁を突入、障壁を越す。

障壁を越すに、其美槍と曰る。御術の本然に現れて優勝を遂す。これと業の本然をくわむに先立ち各大學優秀選手と相を並べて戦ひ、一瞬の間たるも一息を心細く争ひにその意氣や壯と云ふべく、益々以て騎道の精進せんと固く期す所があつた。

以上簡単に戦績報告とす。

神宮競技豫選報告

八月四日開催予定の神宮競技大會本道予選が五月十二日、旭川今村部隊に於て行はれた。同大會は従來日本學生馬術選手権大會と云はれられてゐたものであるが、昨年大日本騎道會が創立されて、本年度より學生の外に、一般班、及少年班が新に設けられ、學生は三名中一名、一般は三十八名中三名、少年は十名中三名を各々送出すものである。

当部よりは七名参加し、予選競技実施の結果、一位工學部一年目小林五郎君、二位(補欠)豊

実三年回態澤洋君が予選通過の栄を擧げたのである。

予選競技は馬場及障礙の二種目に分れ、前者は停止、短縮歩、同着歩、前後旋回、斜横歩、短縮短歩同着歩の各項目に於て採與され、後者は最高一米一の障礙の十個につき採與されたものである。

競技は午前九時、今村部長臨席の下に開始され、正午近く完了した。一般班の参加者は予想外に少く、僅に大名であつた。

尚竟衣學領の詳細に就ては、当部送 監督の許に記録があることを附記して置く。(福 本 記)

研究事項

馬術に熟達せんとするものは、人馬の親和を求めねばならぬ。

人馬の親和を求むる方法は多種多様なるも、手入はその有力なる一つの方法にして、かの乗り放題とそのまゝ馬房に繋ぐが如きは、忠実にして可憐なる動物に於て、虐待なるのみならず、馴致の好機を失ふ。

然らば手入の効果如何と云ふに、

1. 施を去り、疲勞を愈す。
2. 栄養を良好に与す。
3. 馬場を廣くす。

予選の成績を要するに於ては次の諸點に注意する。

1. 被毛は施の疎なく、光沢を帯びて病状に密着しあるか、否か。

2. 鬃、尾、腹、腰、膝等に施を留めざるか、否か。

3. 指を毛波に逆みて摩過すると、指が汚れるか、否か。

次に馬の表情と其の心理について一言しよう。馬はよく耳、眼、頭、口、尾等に其の感情を現はすものなる故に、其の表情を観察するに於て此の點に注意を要する。

樂ぐつたき時と、痒ゆき時馬は、樂したき時、或は痒ゆき時、何物かを噛まんとして齒をかり／＼鳴らすか、又は自ら馬体の痒ゆき部分を咬んで慰む。故に悲意ではないが痒ゆき時、樂ぐつたき時、人が接近すると不意に噛むことがある故、注意を要する。

噛まんとする時は、馬は明らかな眼に敵意を表し、耳を後方に倒し、頭を下げて、噛まんとする方向に出し、口唇を動かして門歯を露出する。

蹴らんとする時は、耳を後方に倒し頭を下げて、眼を蹴らんとする方向に、奇異なる機目を映して見る。

疲勞せし時は、其の疲勞を著しく眼、耳の諸動作に表はすものにして、頭を下げ、眼の働き鈍く、起きつゝ眠る。且諸動作は著しく敏治を欲せ、若し起立せしむ、後肢の一方の蹄を挙げ、蹄尖にて休み居るは其の後肢の疲勞せしことを示すものである。

心地よき時、例へば、顎を下掻いてゆるぎある時は、頭を下げ、頭を前方に伸ばし眼を細くして、如何にも心地よげにする。

初に馬術部に入つて出来ることは、私共の喜びに堪へない所でありませぬ。

感心 相心

一 豫料 注

数年前よりの希望であつた馬術といふ事を、この馬術部に入つて出来ることは、私共の喜びに堪へない所でありませぬ。

新入部員は馬術の未経験者が多く、殆ど全部を占めてゐる事はお互に心強く、又一緒に始めから大いにやつて行かうとの決心を固くしたのだ。いろいろの新入生の歓迎會に於て必ず出る落馬の話には、未経験の我々も少なからず恐れと、反撥心を抱いたのでした。やがて最初の練習日に雑多な喜びと希望との交錯した氣持で馬場に出ました。「馬は乗手が下手だと馬

持て馬場に出ました。」馬は乗手が下手だと馬

「肩に上げておきかたない。」と囁き聞かされてゐたので、半ば諦めて初めて初めに馬上に上つたのでした。放へられぬ通りにすると、意外素直に動いて昇れるので、奥にうれしく、もう一かどの騎士になつた様気かしました。

然し下馬してから、本当に一寸歩き出した程度に過ぎないのであると思ふ時、我々は更に一練習を積んで、馬術が平常の動作の如く出来る様になるまで行かざればならぬと思ふ。幸に文武会の馬術部としてある處に本科の先輩が友達の如く、又兄の如く懇切に我々後輩を指導して下さいるので、その良我々は非常に思はれてゐると思ひます。又先輩には輝かしい成績を残されてゐる人が澤山ある事を聞かされ、我々は益々奮励の重大なるを痛感する。同時に、前途に果すべき大きな目的が横はるのを却て欣幸とし、暖台のある練習が出来るとあらう事を、うれしく思ふ次第であります。

尻 乗

熊 澤

光

馬に乗り初めてから一番楽しくもあり又記憶に残るのは旭川の合宿だ、と三つとも僕は末に二度より参加して居るのだが、……。先にも合宿に行くとき

彼を先導するが本日は……。昨年十二月の合宿の時、前代本面（それ分も昨年十二月の合宿の時、前代本面）それ程でもないのだが）の珍プレーを演じて来た。此れを知つて居るのは現部員の中の四人と今年卒業された二先輩のみなので此處に自己紹介をします。

と云ふのは丁度十二月の合宿は六人より行かず、それ僕を除いては皆上手な人ばかり。それで最初の日から一米六。の障礙を越はされた。何しろ未だ一米で走れるか飛べないかの處なのにいきなり一米六のと聞かされては少マオゲケが極つた。それで走つたる顔付（多分悠々として居る積りなんだが或は青くなつてブルブルだつたかも知れない）で向つた。標が馬の奴踏切を知らなかつた（之は後で聞いたのだが何しろ三ヶ月の短期訓練の馬存のせかり）ので横木の處で踏込込んでしまつた。それで奴さん飛ぶのをやめてビツタリ止つてしまつた。乗つて居る自分は「何だ奴、飛べなかつた奴」と半口惜しくもあり又半分安心した様な氣がしたのを束の間、奴

さう一歩進んだと思つた何ぞ思つたないままに、練習に向つてその標の飛ぶ上つてしまつた。「おれや」と思つた瞬間、標を落し、中を飛び越してしまつて居た。だがその時、僕は馬の背に乗りかつてゐるのを知つたが、いやに乗り心地の悪い處を見ると鞍の上では無いが、さて何處に居るんだらう」とと彼と向く見るに互々馬の尻にナヨコナと乗りかつて馬はテケテケと走つて居る有様、自分を馬の尻で大笑、外へ人はと見ると教官初め先輩諸君腹を抱へてゲラゲラと笑つて居る。

今迄預乗と云ふのは良く聞き又見ても居るが未だ尻乗は見ず事を知つたこともない。が去つて見ると尻に引掛つた自分も自分だが、馬も良くてその場から一米六のを飛越へたものだと思つて居る。之の時の合宿は練習の外に色々な面白い事があった。本その、騎馬戦や、帰途營外に出つてからの雲の上の格闘や、さては修行生へ帰つてから社監に氣付かれない様に声も立てずに荷團蒸したり、此等は皆馬性氣が練習だけでフアイトを使ひ切らずにやつたことで、今年卒業された一南嶋先輩が九幡天三、四人が相手に奮闘したことを、け加へて置きます。た